

一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 素人の手には負えない。
- ② 台本を榑読みする。
- ③ 潮風がふく。
- ④ 苦楽をともにする。
- ⑤ 生活にシシヨウをきたす。
- ⑥ 国からホジヨ金が出た。
- ⑦ オンコ知新の精神。
- ⑧ 直線と直線がマジわる。

二

次の①～⑤の各文の「A」「B」「C」「D」「E」に入ることはが（ ）内の意味になるように、あとの語群から一つずつ選び、それぞれ漢字に直して書きなさい。

- ① 行方不明者の「A」を気にかける。（無事であるかどうか）
- ② 私たちには教育を受けさせる「B」がある。（当然しなければならぬこと）
- ③ 環境問題について、相手との「C」が白熱する。（筋道を立てて相手と話し合うこと）
- ④ 多くの木々が茂った森は、まるで「D」の芸術作品のようだ。（人の手が加えられていない状態）
- ⑤ 帰宅すると合格通知が届いていて、とても「E」した。（気持ちが高まること）

語群

- ・ケンリ
- ・ネットイ
- ・コウフン
- ・アンテイ
- ・ギム
- ・テンネン
- ・アンピ
- ・タイリツ
- ・ギロン
- ・ホウコク

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

山本鈴美香さんの漫画『エースをねえ!』に、フオアとバックそれぞれ専門のコーチがついている外国人選手が登場する。それを知った主人公の岡ひろみがAあぜんとする、というさほど重要でもない場面が、なぜか今でも忘れられない。

私が初めて『エースをねえ!』を読んだのはもう三十年も昔のことで、現在ではたぶん、テニスに限らずスポーツ選手に複数のコーチがつくことはめずらしくないのだろうが、当時はけっこう斬新な発想だった。フオアとバックの専門コーチがいるのなら、当然サブ専門もいるにちがいない。ボレー、スマッシュ、ロブ、ドロップショット、クレーム、コイントス専門コーチがいても、おかしくないはずだ。と、物事がどんどん細分化されてゆくと、私は何とも言えず気持ちが悪くやわらぐ。①世界が好ましい方向へ推移しているのを感じる。

逆に、グローバル化、市町村合併、敵対的買収、大型商業施設進出等など、となってくるとたんに元気がなくなる。私の出る幕ではないという気がする。

いつだったか杉浦日向子さんがNHKの番組で、江戸時代はつまようじだけを商売していても生活できたんですよ、とおっしゃっているのを聞いた。のき下に平台を置き、つまようじをならべる。お箸も湯飲みも醤油差しもなし。潔いほどにすっきりとした陳列風景。食後にほんのひととき役立つ以外、ほかにほとんど使い道はなく、あつという間に捨てられてしまう、たよりなく細い、先のがった棒。ただひたすらそのみに関わって生涯を過ごす。適度な硬さとしなりを求め、原材料の入手には妥協を許さない。もちろん、一本一本削ってゆく技術は熟練している。万が一削り残しが舌に突き刺さったりしては信用を失うから、気がぬけない。前歯のすき間に最もうまくはまる角度は何度か、じやまにならずなおかつ手におさまりのいい長さはどれほどか、日々研究を重ねている。やがて頭のところに施す溝は、彫刻芸術の域にまで達する。

そんなふうにして過ぎてゆく人生はきつと平和だろう。理由は説明できないのだが、もし自分がつまようじ職人を主人公にして小説を書くとしたら、最後彼に、「ああ、いい人生だった」と感謝の言葉を述べ

パリやウィーンのせまい通りを歩いているとき、思わず目をうばわれる店に出会うことがある。勲章屋、標本屋、名刺印刷屋、地図屋、楽器修理屋、古絵はがき屋……。それらはたいがい、自分には無関係なものを商っている。私は名刺を作る必要もないし、こわれた楽器も持っていない。にもかかわらず、②立ち止まり、じつと中をうかがってしまう。

そこは、最小単位にまで細分化された場所だ。世界に定規を当て、鉛筆で格子に線を引いてゆき、これ以上は無理、というところまでいったときに残される一ますがその店だ。もうかるかもわからないか、などという問題はとうに超越している。本当にそこを必要としている人だけが、そこにたどり着ける。

主人は薄暗い店の奥に、あまりにもすんなりと溶けこんでいるので、売り物の一部かと錯覚するほどだ。大きすぎず小さすぎず、自分の体にぴったりとなじむスペースにおさまって、すべてが充足している。何一つ余分なものはなく、また何一つ欠けてもない。そういう店がならぶ通りを歩いていると、世界のどこかに必ず、自分にフィットする一まがあるはずだ、という気分になれる。

しかし細分化は、ときに複雑さともなっている場合があり、困った事態を引き起こす。たとえば昔は、汽車に乗るとなれば、駅できつぷを買うよりほかに方法はなかった。ポツポツと穴の開いた丸いガラス窓に向かい、「〇〇まで片道子供一枚」と言い、さいふからお金を取り出す。それがすべてで、何の不都合もなかった。

ところが細分化の進んだ今はどうだろう。エキスプレス予約に早割り、特割り、トクトクきつぷ、ぐるりんパスにおでかけパス、イコカにパスモ、そのうえ丸窓の向こうにいるはずの駅員さんは少なくなる一方で、タッチパネルの自動販売機ばかりが目立っている。子供のころはお利口いきつぷが買ったのに、大人になればなるほどおばかさんになって、自動販売機にピーピー叱られている。

C テレビ。私のよく知っているテレビについてはいたが、むやみに回すとテレビがこわれると言われ、子供がさわってはいけないことになっていた。色や画像を調節するつまみもついてはいたが、むやみに回すとテレビがこわれると言われ、子供がさわってはいけないことになっていた。

なのになちよつと油断しているときに、リモコンと呼ばれるものが登場してきた。片手にのるほどの物体に、なんと数多くの小さなボタンが配置されていることであろうか。ダブルウィンドウ、ヘッドライン、消音、マルチサーチ、文字画面切替、プログレッシブ、トップメニュー。私はしげしげとリモコンをながめる。もう十分に細分化されたと思っ

(小川洋子「遠慮深いうたた寝」による)

(注1) フオアとバック——ともにテニスの打球するときのフォーム。

(注2) 斬新な——目新しい。

(注3) 細分化——こまかく、いくつもの種類に分けること。

(注4) グローバル化——地球規模の視点でものを考え、行動すること。

(注5) 杉浦日向子さん——漫画家。江戸の生活風景をえがいたものが多い。

(注6) 妥協を許さない——ここでは、手ぬきなどをしないこと。

(注7) フィットする——ぴったり合う。

問1 次のI・IIの問いに答えなさい。

I 線部A「あぜんとする」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア おどろいて声も出せなくなる

イ ぼんやりして何も考えられなくなる

ウ 圧倒され身動きがとれなくなる

エ うれしいことが起こって時間をわすれる

II B に入ることをばを三字で考えて答えなさい。

問2 線部①「世界が好ましい方向へ推移している」とありますが、これについて説明した次の文の「 」に入る内容を、八字でぬき出して答えなさい。

・世の中が、私の元気が生まれ、「 」 「方向へと変わりつつあること。」

問3 線部②「立ち止まり、じっと中をうかがってしまう」とありますが、その理由について述べたものとして、最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 世にもめずらしい品物を仕入れたのは、どのような人なのだろうかと関心をもたずにはいられないから。
- イ もうけを一切計算せず、だれも買うはずのない品物を売り続けていることに敬意さえ抱いてしまうから。
- ウ ふつうの店では手に入らない秘蔵の品物ばかりを仕入れ、だれも気付かないような場所で売っているから。
- エ 特別な入用がある人だけに求められる品物のみを扱っているところに、計り知れない魅力を感じるから。

問4 本文中の C に入ることばを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あるいは
- イ すなわち
- ウ もともと
- エ たしかに
- オ なぜなら

問5 線部③「まず目はまだまだ小さくなってゆく」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近ごろのテレビに備わる多機能にしりごみする一方で、昔人間の代表として反対の声を上げなければと思っている。
- イ 昔のテレビにはなかったリモコンになじめず、操作の手順をまったく理解できない自分にあせりを感じている。
- ウ 近年過度に多くなり、今後も増えていくであろうテレビやリモコンの機能をもてあまし、とまどいを覚えている。
- エ 最近のテレビの機能がきめ細やかになったのを喜ぶ反面、操作の手軽さが失われたことを残念に思っている。

問6 本文を要約した次の文の「 」に入ることばを、それぞれの指定の字数でぬき出して答えなさい。

・いま世界では、あらゆる物事がどんどん「 a・三字 」されており、必ず誰かにぴったり合う場所が用意されているような気持ちになるが、度が過ぎると、複雑さをとめない「 b・十一字 」ことがある。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

海斗の父はパン職人を目指すと言ってサラリーマンをやめ、単身赴任でパン屋に住みこみで修業しています。海斗はそのことにシヨックを受けて中学受験をあきらめました。やがて中学二年生になり、なぜ会社をやめてまでパン職人を目指したのか納得できる説明を聞きたいと思ひ、小さい頃からの友人である倫太郎と健吾の三人で父を訪ねました。

「みんな、お疲れさま。遠いところ、よく来たね」

父さんは、お店の名前が入った赤いエプロンをつけていた。頭には青いバンダナをつけていて、アルバイトのおじさんという感じのその見た目に、海斗は恥ずかしさしか感じられなかった。

「倫太郎くんも、健吾くんも、大きくなったなあ。二人もいっしょに来るって聞いて楽しみにしてたんだよ」

父さんがうれしそうに、ひさしぶりに会う二人の成長に感動している。

「ここは混んでるから、あっちに行こうか」

三人はAうながされるまま、お店の裏側のほうに向かった。関係者以外立ち入り禁止の看板が出ている柵をまたいで乗り越えようと、パンの焼ける匂いがさらに濃くただよってくる。

その先に、折りたたみ式の小さな机と、学校の体育館にあるような鉄パイプのすが用意されていた。

「お昼食べてないだろ？ 焼きたてのパンを用意したから食べて食べて」

その机の上には、見慣れた紙袋と、ペットボトルのお茶が用意されていた。

いすに座って、とりあえず紙袋の中に入っているパンをそれぞれ選んで食べ始める。

「うまい、ヤバイ、うまい！」

健吾がテレビの食レポのタレントみたいに、感動の声をあげる。

「ほんと、マジうまいな。これが食べたくてみんな遠くから来るのか……」

倫太郎も小さくうなずきながら、味を確かめるように食べている。

そして海斗も、二人の前で、父さんのパンなど食べたくなないと、わがままな姿をさらすわけにはいかず、適当に選んだクリームパンをバリと食べる。

お腹がすいていたのもあって、ものすごくおいしく感じたけれど、海斗はとにかく急いでそれを食べきった。

「いやあ、二人に喜んでもらえて、おじさん感激だなあ」

うれしそうなお父さんの顔も、目をそらしたくなるばかりで、まともに見ることはできない。

「ああ、マジ、お腹いっぱい。うまかった〜」

用意されていたパンをすべて食べ終わると、健吾が気持ち良さそうに両手をあげてのびをした。

「ごちそうさまでした。ほんと、おいしかったです」

倫太郎は礼儀正しく父さんにお礼を言うと、立ち上がった。

「健吾、向こうに行ってみようぜ」

そして、さりげなく健吾をうながす。

「えっ、なんで？」

「おまえ、ここになしに来たと思ってんだよ」

倫太郎があきれたように目配せをすると、健吾はようやく、あつそうかという顔をして立ち上がった。

海斗は父さんと二人きりなんて気まずくて、二人にいてももらったほうがいいと思うくらいだったけれど、引き留めるための言葉は、浮かばなかった。

「二人とも、いい子だなあ」

二人がいなくなると、父さんも気まずいのか缶コーヒーを両手で包むように持ってそれを見つめている。

「うれしいよ。海斗がこんなところまで会いに来てくれてさ」

そうは言うものの、さっきのうれしそうな様子はもうなくて、ひどく緊張しているようだ。

海斗は、健吾と倫太郎が向かった雑木林を見つめた。紅葉が始まりかけていて、ところどころ赤や黄色に染まっている。

「①聞きたいこと、なんでも聞いてくれていいぞ」

聞きたいこと……。

父さんにそう言われて、海斗は雑木林を見つめたまま、佐々木さんとの会話を思いだした。

「前の会社での仕事って、やりがいなかったの？」

「やりがい……か……」

父さんは少し考えこむと言った。

「やりがいはあったかもしれないけど、②自分がやりたくて、やってる仕事ではなかったんだよな」

「言ってる意味がわからない」

わかるように説明してくれと、思わずイライラした声が出る。

「実は父さんは、そもそも自分で自分の人生を決めてこなかったんだよ」

海斗はやっぱり言ってる意味がわからないと思いつつ、黙っていた。

「おじいちゃんがとても厳しい人だったからね。小さいときから一生懸命に勉強して、いい成績をとって、認めてもらわないといけなかったんだよ」

海斗は四年生のときに亡くなった、父さんのほうのおじいちゃんを思い浮かべた。

「おじいちゃんが、納得する学校に行って、納得する成績をとって、納得する会社には行って、納得する仕事をするこぼばかり考えてきて、本当は自分はどうしたいのかを、まるで考えてこなかったんだよ」

海斗が物心ついたときには、すでに病気で、身体が思うように動かなくて、会う機会はほとんどなかったけれど、機嫌が悪くて怖い人という印象しか残っていない。

「だからおじいちゃんが死んだとき、ああ、もう、この人の評価を気にしないでいいんだって思ってホッとしたら、毎日なんのために仕事しているのかわかんなくなっちゃってさ」

あのおじいちゃんが元気だった頃のことなど、想像もつかないけれど、優しくったり、いっしょに遊んでくれたりするような父親ではなかったのだろう。

「それで、なにかもリセットしたくなったときに、会社の取引先の人がたまたまここの人で、ここのパンをお土産にくれたんだ。もともとパンは好きだったけど、食べた瞬間、なんかしみじみとホッとしてさ。おいしいって、こんなに人を幸せな気持ちにさせてくれるんだ。自分も『おいしい』って思ってもらえる仕事があったらいいって思ったんだよ」

父さんはそう言うと、足元に置いてあった袋から一冊の本を取り出した。

「海斗、この絵本、覚えてるか？ おまえ、小さいときに持っていただろ？」

それは、覚えているものにも、総也の好きな【パン屋のクマジーさん】だった。

「父さんさ、この本のクマジーさんみたいに、毎日、朝起きて、パンを焼いて、それを人に食べてもらう。そういう仕事というか、生活がしたいって気づいたんだ」

そんな地味な毎日に、あこがれたというのか？

「毎日食べても飽きなくて、おいしくて、朝起きて、あのお店のパンを食べたら、一日がんばれそうだって思ってもらえるようなパンをつくりたいんだ」

ああ、ぜんぜんちがう。ずっと自分が尊敬してきた父さんとちがう。

まあ、いい……。

それが父さんの本心だとしてもだ。

「それって、大人としてどうなの？」

なんで、そこで家族のことを考えなかったのか。

「親のくせに、自分の夢とか追っていいわけ？ なんのために仕事してるかわかんなくなっちゃって、家族養うためじゃないの？ それじゃダメなわけ？ 普通に考えて、おかしいよ。非常識だよ」

どうして父親として、家族を養うことが一番大事だという発想にならなかったのか。

海斗はそれこそが、腹立たしかった。

親として、大人として、ありえないと思うのは、そこなのだ。

「父さんもそう思うよ」

すると、父さんは素直にそれを認めた。

「大人として、親として、ダメなやつだ。父さんは普通じゃないよ。ほんと、非常識だよ」

ダメなやつだ……。

そう、素直に認められると、もう、攻撃する。「B」はなかった。

「だって、自分の人生なのに、ずっとおじいちゃんが喜ぶかどうかで、大事なことを決めてしまったからね」

おじいちゃんが死ななきゃ本当にやりたいことに気づけなかった不幸な男を、自分は父親に持ったのだ。

「父さんはずっと、おじいちゃんの言いなりの、中身がからっぽな子どもでしかなかったんだ。年齢は大人なのに、子どものまま生きてきてしまったんだ」

自分の父親は、年齢は大人なのに、子どものまま生きてきてしまった哀しい男。

その事実を、受け入れるしかない。

それに……。

自分だって父さんのせいにして、中学受験から逃げたようなものだし……。

「サイテーだな」

③ 父さんを責めるように言いながら、その言葉が自分にもはねかえってくる。

「うん……サイテーだ」

「大人失格だよ」

だけど父さんと自分では立場が違うと思っておして、言葉を替えてみる。

「うん、父さんもそう思うよ。大人失格だ。家族の大黒柱としてがんばらなきゃならないのに、それを投げだしてるんだ。父親としても、夫としても失格だよ。だから、本当なら、母さんに離婚されて当然なんだ」

そう、当然。

「だけど母さん、ダメだって言うんだ。人生は何歳からでもやりなおせるってところを、私と子どもたちに見せてほしいって。それが自分で自分の人生を選んでこなかった大人としての役目だって……」

人生は何歳からでもやりなおせる、その姿を見せる……？

「父さん、今さ。生まれて初めて、生きてるって実感できてるんだ。生きてるのが、楽しいんだ。そうしたらさ。父さんの人生に、母さんやおまえたちがいてくれることのありがたみが、やっと実感できるようになったんだ」

だったら……。

「だから今は、母さんがくれた家族のままでもいいさせてもらえるチャンスを、絶対に手放したくないって思ってる」

やりなおすその姿を、見せてもらおうじゃないか。

「父さんはこの通りダメなやつだし、許されないことをしてるってわかってる。だけど、いつか、家族として、父親としてもう一度、受け入れてもらえるようになりたいんだ」

パン屋のクマジーさんみたいな地味な生活で、満足する姿を見せてもらおうじゃないか。

「絶対にがんばるから、母さんにも海斗にも総也にも、新しい父さんを見てほしい」
もう、見て見ぬふりはしないからな。

そして、オレだって ※ からな。

今度は、黙ってあきらめたりしないからな。

そう心に決めると、④もう、質問したいことはなかった。

「そろそろ、帰るわ……」

「そっか……」

父さんは気まずそうにうなずくと、立ち上がって言った。

「じゃあ、佐々木くんに駅まで送ってもらおうよう、お願いしてくるよ」

父さんがお店の中に戻っていく。

海斗は携帯で健吾に電話して、帰るから戻ってくるように伝えた。

(くんの 草野たき『マイブラザー』による)

(注1) バンダナ——染めた木綿ちめんの布。頭に巻き付けるなどして使う。

(注2) 食レポ——料理を食べた感想、コメントを述べること。

(注3) 佐々木さん——海斗の父が働いている、パン屋の従業員。

(注4) 総也——海斗の弟。

問1 次のI・IIの問いに答えなさい。

I ——線部Aについて、「うながす」ということばが正しく使われている文として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生が、ぼくたちに早く帰るようにうながした。

イ 質問をしたが、うながされて答えを聞けなかった。

ウ 本の内容はもつともで、心からうながすほかなかった。

エ 厳しいことを言われて、肩かたを落としてうながした。

II ……線部が、「そうしようと思ってもできなかった」という意味になるように、「B」に入ることばとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア たち イ 余地 ウ 島 エ そつ

問2 ——線部①「聞きたいこと、なんでも聞いてくれていいぞ」とありますが、このときの海斗の父の気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海斗と二人の時間を過ごせるのはうれしいが、二度と親子の関係に戻れないのをさびしく思っている。

イ 息子むすこに会社をやめた事情を理解してもらい、パン職人を目指すことに賛成してもらおうと思っている。

ウ 海斗の中にくすぶっている思いを誠意をもって受け止め、こわれた関係を改善したいと思っている。

エ 厳しい祖父にしばらく、望み通りの人生を送れなかった自分の過去を理解してほしいと思っている。

問3 ——線部②「自分がやりたくて、やってる仕事」とありますが、これについて説明した次の文の「 」に入ることばをそれぞれの指定の字数で考えて答えなさい。

・自分の「 a・二字 」で「 b・三字 」仕事。

問4 ——線部③「父さんを責めるように言いながら、その言葉が自分にもはねかえってくる」とありますが、このときの海斗の気持ちについて述べたものとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親失格であると激しく非難することによって、父親の愛情に恵めぐまれなかった自分の身の上のあわれさを実感している。

イ 自身の目標から逃げだしたという点では、自分も情けない人間であり、父親の非をとがめる資格などないと思っている。

ウ 大人になっても精神的には子どもそのままである父親を不快に思うが、自分もその点では同じであると気づかされている。

エ 実の息子である自分が父親を悪く言えば言うほど、数々の自分の過去の悪事が思い出され、つらくなるのを感じている。

問5 ※ に入る海斗の心のことばとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父さんに立派な息子として認めてもらう

イ かつての自分を受け入れる努力をする

ウ だれにも負けない人生を手に入れる

エ 自分で選んだ道を、進ませてもらう

問6 ——線部④「もう、質問したいことはなかった」とありますが、このときの海斗の気持ちを説明した次の文の「 」I・IIに、適切なことばをそれぞれ二十字以内で書きなさい。

・父の、「 I 」とする姿や「 II 」気持ちを知って、父を応援したいと思いは始めている。

問7 あなたが海斗の立場であったなら、父の決意を聞いて、今後どのように接しますか。あなたの言動がわかるように八十字以内で自由に書きなさい。